

平成18年度県とNPOとの協働事業について②

事業名	県立中央博物館における県民と専門家による『千葉干潟展』開催事業
団体名	特定非営利活動法人 千葉まちづくりサポートセンター 【所在地／連絡先】 千葉市緑区大椎町 1188-129／090-9970-1749
県関係課	教育庁教育振興部文化財課 【連絡先】 043-223-4127 県立中央博物館 【連絡先】 043-265-3111
<p>【事業概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 県立中央博物館における県民と博物館の専門家による企画展示「千葉の干潟展—砂と泥にかくれた驚きの世界」の開催 ・ 博物館や地元の講師による調査・観察会を県内の代表的な干潟3箇所で開催 <p>【事業形態】 委託</p> <p>【事業費】 3,602,088円 (このうち県の支出 3,602,088円)</p>	
<p>【活動地域】 県立中央博物館、三番瀬、盤洲、夷隅川流域</p> <p>【事業成果】</p> <p>■受益対象への具体的な成果</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 地域の課題をテーマに提案した企画展示が協働で実施されて、県民にとって博物館が今までより身近に、重要に感じられるようになった。 2. 多数の入場者(5,000名)があった。博物館の収益につながった。 3. 関連イベントは多数の参加者を得て、参加型の展示も人気で博物館も活気があふれた。 4. 「千葉の干潟マップ」を配布。 <p>■達成度</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 入場者の約8割の方に県民の展示当番が対応し、目標とした干潟の価値を分かりやすく伝えることができた。展示や説明に対するアンケートの結果は好評だった。 2. 事業に関わったNPO実行委員や地域スタッフのほぼ全員が、「博物館との協働は良かった、これまでは近寄る機会がなかった博物館の人に干潟や博物館で接した、干潟での調査も引き続き充実させ、資料としてまとめていきたい」と終了後の成果を確認できた。 3. 関連のイベントなども博物館と市民グループが協力し、多数の県民とともに成功裏に行うことができた。 <p>■波及方法及び効果</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 3地域グループ同士の交流が進み、それぞれの目指す干潟の保全や現状を学びあった。 2. 博物館に県民との協働のあり方を示すきっかけになった。課題も多いが、将来の可能性や次のステップも見えてきた。 	



現地観察会 三番瀬

評価委員会による評価結果

協働事業 実施前 について	<p>本事業のパートナーのあいだでは、事前に<u>基本的な合意は形成されていた</u>ようですが、ややNPO側の発言力が強く、意思疎通が十分でなかったように感じられます。特に、専門性を要する展示について、必要な協議と役割分担の確認がなされておらず、そのゆがみが事業過程の随所に現われています。ほんらいは、博物館の研究者とNPOが互いの特性を引き出し、相乗効果が発揮されるようにするための協議が望まれました。</p> <p>少なくとも作業の手順等については、もう少し詰めた調整が必要であったと思われる。この点は文化財課が自己評価しているとおりのので、問題解決のための調整を促す役割が同課に求められたのではないのでしょうか。このことは、<u>県の関係機関が複数にわたる場合に、一般的な問題として留意されるべき</u>でしょう。</p>
協働事業 実施中 について	<p>事業実施中の協議回数が多い割には、本事業の意義等の理解について、当事者間（特にNPOと博物館）での齟齬がなかなか解消されず、またそのことが、具体的な作業（展示作業など）が円滑になされなかった一因であるように感じられます。もっとも、形式的な面についていえば、打合せ事項をメーリングリスト等で共有したことは、積極的に評価されるべき要素でしょう。</p>
協働事業 実施後 について	<p>おそらくはパートナー双方の組織文化的な相違に起因して、事業自体の理解に相違があったこと、対等な協議と意思疎通が十分に図れなかったこと、役割分担を明確にできなかったことが、残念に思われますが、これらは今後の類似の取組みにおいても問題になることが予想されます。概してNPOは、スケジュールをたて、その通り仕事を進めるのが不得手であり、このことはNPOが協働事業を行ううえで基本的な障害になっています。そこで、<u>本事業を振り返って、相互理解の促進に向けて、NPOと県がそれぞれどのように対応すればよかったのかを、具体的に検討し、将来の協働事業の参考に供してほしい</u>ところです。</p> <p>このように、<u>本事業はパートナーシップという点では課題を残していますが、その一方で、当初の事業目的どおりの成果をもたらしたことは、積極的に評価</u>できます。具体的には、干潟保護に取り組む県民の話が来場者に好評であったこと、博物館をフィールド・ミュージアムにする方向性の刺激になったこと、参加者や県民の中から専門性の高い人を発掘できたこと、などです。</p> <p>また、<u>県側は本事業を「県民に開かれた（身近な）博物館」に向けた初めてのチャレンジであると位置づけていますが、多くの市民（32団体・152個人）の協力を得たことや、5千人という来訪者数からみても、所期の目的は達成</u>されたと評価できます。さらに、<u>本事業を通じて協働事業の困難さを感じつつも、県側が地域における博物館の役割を再考し、協働の意義を深く認識するようになったことは、目にみえない成果といえるでしょう。</u></p> <p>とはいえ、<u>今後に向けた課題の整理や、本事業に関する情報発信が弱いように感じられるので、将来類似の企画を手がける団体が出現するように、積極的な活動が望まれます。</u></p>